

<b>Title</b>	関係論に立つ福祉実践(パネルディスカッション「震災への関わりと震災の語り」)
<b>Author(s)</b>	稲松, 義人
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 45-53
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5335">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5335</a>
<b>Rights</b>	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

パネルディスカッション「震災への関わりと震災の語り」

## 関係論に立つ福祉実践

稲松 義人

その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってください。るように、収穫の主に願いなさい。行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。財布も袋も履物も持つて行くな。途中でだれにも挨拶をするな。どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。その家に泊まって、ここで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。

(ルカによる福音書一〇章一一九節)

## はじめに

私は、クリスチャンホームで育ち、キリスト教主義の大学で社会福祉を学び、卒業してすぐにキリスト教主義の社会福祉施設に就職してこの春で満三五年となる。日本の社会にあつては、比較的キリスト教的な環境の中にいたが、あくまでも一信徒であり、聖職者でも神学者でもない。「国際神学シンポジウム」で所見を述べるような見識があるとは思えないが、これまでもそうしてきたように、私がこれまで生かされてきた中で、その時々、その場で与えられた役割に私なりに取り組んできた経験から教えられたこと、感じてきたことをまとめることで、多少なりとも役割を果たすことができれば幸いである。

## 東日本大震災

東日本大震災は、リアルタイムで突きつけられた津波の映像の大きな衝撃とともに、これまで私たちが取り組んできた社会福祉の実践に大きな反省を迫る出来事となった。地震が発生した二〇一一年三月一日午後二時四六分、日本キリスト教社会事業同盟（以下、社事同）は、静岡県の浜松駅前のホテルで、理事会を開催していた。ちょうど議事を終えて解散しようとしているところで、ゆっくりとした長い横揺れを感じた。そのときはまだ事の重大さを認識せず、そのまま解散し、私も自分が責任者を務める浜松の海岸近くにある施設に戻った。そこでテレビを通して、あの大津波の

凄まじい映像を見、また静岡県沿岸にも大津波警報が発令されていることを知らされた。

自分の施設では緊急時の対応を指示し、社事同については被災地となった東北地方にある加盟施設の被害状況の確認に努めた。なかなか連絡がつかなかったが、二、三日のうちに関係施設ではただちに施設の機能が停止してしまうような被害がないことの確認が取れた。社事同の理事たちに連絡を取り、現地から要請があれば連携してワーカーを派遣しようという方針を確認し、その後も情報収集に努めた。しかし、具体的なワーカー派遣の要請は届かなかった。自分から動くにも被災地が遠隔地であることと、被災地が広域であることが決断を鈍らせた。不用意に動くことは被災地に負担を強いることにもなりかねないという思いと、こんなときこそ何かしなければならぬという思いとの間でジレンマを感じた。

社事同は、日本基督教団と関係のある社会福祉法人によって構成されている。日本基督教団は、四月になって正式に東日本大震災救援対策本部を組織するにあたり、社事同からの委員を一名加えることとした。その決定を受けて、私は五月から教団の救援対策本部会議に出席することになった。会議に出席して感じたのは、様々な背景をもつ教会が合同して組織されている教団は、緊急時にすばやく意思決定して行動に移すには、組織体制の面で弱さがあることだった。しかし、それは社事同についてもまったく同様で、社事同に加盟するそれぞれの社会福祉法人はそれぞれに意思決定をするのであって、社事同としてまとまって即時のニーズに応えて事業に取り組むための下地をもっていない。

その後の取り組みを振り返ると、教団の救援対策本部は、被災教会への支援、地域の被災者に対する支援などについて協議し、効率的であったかどうかは別として、できる範囲のことに精一杯取り組んだし、社事同もまた、全体が結集した取り組みはできなかつたが、わずかながら被災地の一部に対して介護職員の派遣などに取り組むことができた。

## 日本のキリスト教社会福祉

歴史ある日本のキリスト教社会福祉施設には、海外からの宣教師の働きによつてその礎を据えられたところが少なくない。また、強いリーダーシップをもつた篤志家とされるキリスト者個人によつて創立されたところも少なくない。宣教師たちは、母国を出て日本の社会に定着し、地域に根ざして福音を語り、社会的に疎外された人たちの福祉事業に取り組んだ。篤志家たちも、また、社会の底辺で生きる人たちの現実を看過することができず、目の前の課題に向き合い、社会的に自立して生きることの困難な人たちを、自分たちの生活の場に受け入れ、共に生活することから事業を展開した。

このような海外の教会のミッションによる働きや、キリスト教篤志家たちの働きを周囲から支援する人たちは少なくなかったが、その働きを、日本の教会が、自分たちの教会の使命として捉え、組織的・継続的に取り組んできた例は、案外少なかつたのではないだろうか。

また、もともとは教会の祈りの中から芽生え、教会が運営の責任をもつ事業として展開している社会福祉施設も、社会福祉法人という形態をとり、公的な制度に経済的基盤をおいて事業展開していく中で、あるいは徐々に非キリスト者の職員の比率が増えていく中で、次第に教会とのつながりが薄まっていったところはかなり多いような気がする。

## 内向きの教会形成と施設運営を主たる事業とした社会福祉法人

今回の被災地支援への取り組みを通じて、教会と社会福祉法人には共通する欠点があったのではないかと感じている。もちろん、すべての教会が同様ではないし、すべての社会福祉法人が積極的に被災地支援に取り組めなかったわけではないが、おおむね同じような傾向があったのではないかと思っている。私は、教会の中で育った者として、また、社会福祉に携わっている者としても、これまでの生き方に反省すべき点があったことを感じた。

先に掲げた聖書の物語では、主イエスは、働き手をそれぞれの町や村に派遣するにあたって、その町や村で共に生活し、そこで関わりをもった家庭一つひとつの平和を祈り、神の国が近づいたことを告げるようにと求めている。

キリストの福音は、教会に集まってきた人たちの中で、その人たちだけに告げ知らされるのではなく、町や村、教会の外の地域で暮らす多くの人たちに向けても語られなければならない。海外から来た宣教師たちは、あるいは開拓伝道をする牧師たちは、出て行って、その地域に教会を建てた。しかし、そこに集められた私たちは、その教会の内側にとどまり、出て行くこうとしてこなかったのではないだろうか。

キリスト教篤志家たちが自分たちの生活を開放し、福音に基づいた共同体として据えた福祉の拠点は、やがて制度が整えられ「施設」として位置づけられ、経済的に安定するようになった。私たちはその安定した枠組みの中で働くようになり、自分たちの生活の場は別にもち、施設の中に閉ざされた支援に甘んじてしまった。そして、施設は地域の中にあるながら、地域とは隔たりのあるところになってしまい、施設での支援は、施設の中だけで通用する実践になってしまった。

だから、今回のような、日常を離れた場所での緊急の課題に遭遇すると、施設の中で多少融通して被災者を受け入れることはやりやすいが、施設の日常を崩して、外に出て行くことには様々に躊躇せざるを得ない状況が生じ、職員が派遣されたとしても、いつもの枠組みのない場所で自ら判断して働くことには、少なからず戸惑いを感じたのではないだろうか。

### 私たちが向き合う人たち

社会福祉の仕事をしていると、社会の中で孤立している人たちに出会うことは稀ではない。マスメディアが報じる中にも、いじめ、虐待、DV、貧困、自死、犯罪など、社会福祉的な課題を知らされる機会はいくらでもある。困難な環境におかれた人たちの生活は、衝撃的な大災害に遭遇しなくとも、尊厳を奪われ、社会的な孤立を余儀なくされ、苦悩と悲しみに満ちたものではないかと思う。私たちが、そのことを知っていないながら、そこに関わろうとしないならば、あの大阪波の映像に立ちすくみ、一步も踏み出すことができなかつたあのときとまったく同じではないだろうか。あのときを激しく揺さぶつたジレンマを、一年、二年と時が経つ中で忘れかけてしまっていないだろうか。

### 小羊学園での体験

私は、小羊学園という施設で重いハンディキャップをもって生きる子どもたちと出会い、そこでの生活を通して彼ら

と向き合ってきた。かつては学校教育からも排除され、自分のことを話すこともできず、多くの面で介護を受けずには生活することができない子どもたちである。中には、独特の感覚をもつがゆえに環境に適応できず、激しい行動障害を見せる子どもたちもいた。荒れる子どもたちに向き合うとき、職員たちは自分たちの力不足を痛感し、心を通わせることができず心が折れてしまいそうになる。聖書にあるように「神は何ゆえ彼らにこのようないのちを与えられたのですか」と問いかけたくなり、イエスの教えに対しても「この子の人生にどのような神の栄光を見ることができのでしょうか」と問い直したくなるようなこともたびたびであった。食事を提供し、住居を整え、必要なときに身体的な介助さえすればいい。それ以上の成果を期待しないで、個人的な感情は抑えて、毎日、淡々と繰り返して接するのが介護の仕事だと言いつつも働いても、それではきつと働く行為そのものに喜びを感じることはできないと思う。

しかし、言葉にならない激しい訴えに体を張って向き合わなければならぬときに、子どもたちの命について、彼らは何を求めているのか、彼らは何を伝えようとしているのかを毎日繰り返し問い続けるうちに、そこに生かされている一人ひとりが、自分にとって「かけがえのない存在」と感じられるようになっていく。かけがえのない命として向き合うときに、彼らにどんな障害があり、どのような困難をもっていたとしても、そのことで自分にとって無意味な存在だと思ふことはない。そして、彼らがかけがえのない存在だと知ること、自分自身もまた彼らとの関係の中で居場所を与えられていたことに気づく。そして他者との人格的な交わりのある福祉の仕事にやりがいを感じるようになった。

## 関係の中に生きる

大震災でかけがえのない家族を失い、生活の基盤を失い、将来への見通しを失った人々たちへの支援を、目に見える物

資を支給し、生活費を保障することだけで済ませることはできない。これから将来に向けて、どのように生きていく希望を見出していくことができるかが問われなければならない。

三年前、東日本大震災の非常事態に遭遇したときに、被災した人たちだけでなく、自身が直接被災しなかった多くの人たちも「絆」を求めた。また、日本人が非常事態の中にあつても、つながりを大切にして生きようとする姿は、海外から賞賛された。私たちは、関係の中に生きることこそ、生きていくための希望があることを無意識のうちに身につけているのかもしれない。しかし、あれから三年が経過して「非常時」から脱し少しずつ生活の復興が進んでいく中で、(それは喜ばしいことであるが、) 目に見える価値あるものによつて生活の安心を確保し、自分自身が生きることの価値を確認するようになっていった。

### キリストの福音に立つ福祉

聖書は伝える。私たちがなすべきことは「この家に平和があるように」祈ること、そこで与えられる食べ物分かち共に生きることである。真実の「平和」は、神から与えられた命をつながりの中に見出し、互いにゆるし合い、互いに大切に思うときに示される。そして、そのような平和が感じられるときに、「神の国はあなたがたに近づいた」と伝えることができるのではないだろうか。困難な中でどのような支援をし、どの程度の生活を保障できるのかということではなく、一人ひとりを大切な存在として関わり続けることの中に私たちの実践の原点がある。確かに、かけがえのない大切な人を失い、生活の基盤をすべて失った人たちに向き合うとき自分たちの無力さを痛感し、ただただ寄り添うことしかできない。しかし、私たちに十分な力がなくとも、そこにキリストが共にいてくださるとすれば、きつと神との関

係の中に救いを感じることができらるだろう。キリストの十字架と復活を通して知らされた「神との関係」の中にこそ、本来の人間の平安な居場所があり、この世での人生を超越した永遠の命がある。

いかなる苦難の中にあつても生かされていることの意味を問ひ、失われることのない命の意味をかけがえない関係の中に見出して生きることの希望を伝えること、それが、キリストの福音に根ざした社会福祉実践ではないだろうか。このような確かな「関係論」に立つた社会福祉実践が、今回の東日本大震災を通じて私たちが出会った人たち、被災地にあつて今も困難な中で生きる人たちとのつながりの中で展開されることを願つてやまない。そのために、その地域に立てられた教会が地域に出て行つて福音を語り、そこに生きる人たちの困難を共に担ひ、社会福祉の働きと一体化されるとすれば何と幸いなことであろう。